荘内中まなびスタイル「先行学習を基盤とした協働的な学び」で真の学力の育成

協働的な学びの授業　～授業を委ね、自走する学習者を育成～

これからの学びは自走する学習者育成に徹していかなければならない。そのためには授業改善において、形だけを導入しても成果は得られず、協働的な学びを進めるためのコンピテンシーを習得し、学習意欲が向上している状態が必要である。今後の望ましい協働的な学びを実現するため、共通理解を推進していく。

荘内中の「協働的な学び」は協同学習によるコンピテンシー育成による自由進度学習等の効果的な推進

教科の見方考え方を考慮し、習得・活用・探究というカテゴリーを意識した授業構成をデザインする。

【習得】基礎的・基本的な知識・技能を習得
【活用】知識や経験に照らして自分の考えをまとめて論述するといった知識・技能を活用する学習活動
【探究】課題解決的な学習や探究活動へ発展

授業及び家庭学習を成立させるための最低限

①授業規律は学習活動のベースとして徹底
②学習用端末の使用ルールを徹底
③先行学習課題はマストの取組（徹底させるよう工夫を継続）
④週課題を奨励

単元ごともしくは授業ごとに学習の手引きを作成して生徒に提示する。（多様な学びの場を保障するため必ずClassRoomに提示すること。）

【学習の手引き】様式（指導案）
授業クラス：〇年〇組　授業場所：〇〇〇〇　授業者：〇〇〇〇
【課題・めあて】
【ゴール】（評価基準）
S：
A：
B：
【流れ】（例）
（1）【導入】
（2）【情報の収集】
（3）【整理・分析】
（4）【まとめ・表現】
（5）【振り返り】



授業の中で、単元計画の中で知識技能を習得させる場面を確保し、最低限の学習ラインを担保する。また、定着のための徹底習得の場面やAIドリルの積極的活用等を進めることは協働的な学びのための基盤の取組である。

協同学習を推進



協同学習の推進（入学時から）
協同学習の中で重要な**「個人の責任」「互恵的な学習関係」**を大切にしたコンピテンシーを育成する。
※単なるグループ協議ではなく、ジグソー法等の生徒全員が取り組まなければならない状態を工夫し、進めていく。

- ◆単元及び学習のまとまりの推進計画及び評価基準
- ◆各授業での評価基準（B・A・S）

高いレベルを目指して意欲的・計画的に学習を進めるための働きかけを工夫し、学びに向かわせていく。

- ◆単元末テスト（再チャレンジ）の実施

個人の責任・互恵的な学習関係、解に向かうためのグルーピング意識等が定着

自由進度学習を推進



自由進度学習の推進（効果が想定されてから）
パフォーマンス課題を工夫しながら、クラス全体がそれぞれに適した学習方法を選択し、学びに向かうよう授業をデザインする。

- ◆単元及び学習のまとまりの推進計画及び評価基準
- ◆各授業での評価基準（B・A・S）

高いレベルを目指して意欲的・計画的に学習を進めるための働きかけを工夫し、学びに向かわせていく。（教員は底辺層を支援）
- ◆学習方法・学習形態の選択
- ◆**レベルアップを続ける課題提示**

- ◆単元末テストの実施（各教科フォーサイト手帳で試験勉強を推進、再チャレンジは必要な場合実施）

協働的な学びの授業の基本イメージ

各種学習活動にGoogleアプリ等を効果的に活用
個人思考の整理、思考内容の共有、グループ協議の整理、学習成果の提出等

先行学習課題
導入部で先行学習の定着度を確認

学習のめあてを共有

教員の教授（習得）

個人思考場面の設定（個人の責任の明確化）
他の人に任せたら済むような場面をつくらない！（参加する責任）
・全力で仲間を高める責任
・仲間の援助に応える責任

ペア・グループ活動等
思考の深化のための互恵的な関係による協働的な学び

思考ツールの積極的活用

自由進度学習による個別最適な学びの深化

協同学習

協同的活動場面の設定
・学級全体での学び合い
・ペア、グループ活動
EX：**ジグソー法は効果的**
・説明・プレゼン発表等のアウトプット活動（全員できる工夫）
※お互いに評価できる基準を提示
★学習班は4人を原則
★**互恵的関係を構築**

自由進度学習

自由進度学習場面の設定
・学級全体で学びに向かう機運のもと、個人、ペア、グループ活動等を個人で選択
※評価基準を明確化
★**先に進んで深化していく学習課題の提示**
★**到達水準提示（水準レベル）**
★**教員は学習困難生徒へ支援**

学習の手引き提示
評価基準を確認しながら高い目標を設定

先行学習課題はスタディサプリ等のクラウド課題で提供振り返り提出や個人思考のクラウド課題化も推進

教科書の徹底活用が原則

AIドリルの活用、AIを活用した自学自習ができるよう工夫

家庭学習時間（1日100分、土日含む）を想定して9教科の課題をイメージ

まとめ・振り返り

○自己分析による弱点整理
○新しい課題発見
○自己の考えの深化確認や成長確認

単元末テストに向けた学習の取組を指導＆適切な評価のフィードバックによる学習意欲の向上

単元及び学習のまとまりでの授業イメージ

フォーサイト手帳

学習の手引き作成
学習の流れ、評価基準を明確に伝える。

単元の学習の流れをイメージ

単元学習のゴールをイメージ

記録に残る評価

単元末テストの予告
計画的な学習を促進

協同学習場面や自由進度学習場面の設定による学習内容の深化

記録に残る評価

単元末テスト

総括評価

再チャレンジ

再評価

習得のための反復学習場面

2か月サイクル学習を意識した学習支援

教員の学力診断テスト分析による集団の弱点把握

授業の中で既習内容の再確認場面を設定

週課題の工夫

テスト週間の取組

学習に向かう力の育成

単元の学習を進めるだけでなく、2か月サイクル学習を意識した既習内容の再学習（週課題を活用）も意図的に実施（得点力アップには重要） フォーサイト手帳活用

課題の提示や学習イメージの提示、指示・連絡等はChromebookで実施、提出物等もできるだけクラウド活用

荘内中：学びスタイル「先行学習を基盤とした協働的な学び」

小中一貫教育

【荘内小学校で定着させる中学校での学びに向かう力の育成】
小学校では中学校での学びスタイルを意識して小学校卒業時の資質・能力を育成
①学び合い活動充実の中で協同学習＆自由進度学習へ移行するための資質・能力を育成
②発達段階に応じた予習・復習の学習サイクル推進能力の育成（チャレンジノートの取組等）
③発達段階に応じた情報活用力・情報編集力及び学習用端末活用力の育成

円滑な移行

管理職部会・学力向上部会で定期的に小中一貫教育による学力向上を協議

荘内中：学びスタイル

自走する学習者育成のため、先行学習を基盤とした協働的な学び（協同学習によるコンピテンシー育成の上での自由進度学習等の協働的な学び・個別最適な学び）をデザインする。

【学びスタイルの概要】
①先行学習として、授業以前に学習内容の概要をイメージし見通しをもって自学自習に取り組む予習学習活動を基盤とした授業をデザインする。
②授業では協働的な学びを推進し、他者の意見や考えを取り入れながら自己分析・自己調整を繰り返しながら個別最適な学習に意欲的に取り組み、自己を高めようとするよう指導法を工夫する。
③習得、活用、探究場面を授業者が明確にもち、学力定着に向けた取組の主旨を生徒に伝えながら、集団で学力向上を目指すよう指導法を工夫する。（課題解決型集団の育成）
④生徒の自己評価や学習状況を把握し、特別な学習支援が必要な生徒に対し、協働的な学びの中での個別支援や個別最適化課題等により特別な支援を行う。

1 先行学習活動を重視（メタ認知能力の醸成）＆週課題等も充実

先行学習（各単元の学習内容に応じて設定）
（1）授業前の教師が指定した内容を予習する学習　（2）単元全体の学習内容を予習する学習
（3）生徒が独自に取り組む予習学習　（4）AIを活用した自学自習ができるためのスキル習得

【先行学習の留意点】
（1）教科書を読解する活動を重視して提示
　①教科書を読解する力は、自学自習の基本的且つ重要な能力であることを重視して指導を徹底
　②単元評価に反映するため、教科書を読解した学習履歴を残す課題設定を工夫
（2）学習用端末を活用するクラウド予習課題を提示
　①教科書読解後にスタディサプリでの動画視聴及びAIドリルの積極的活用
（3）チャレンジノートによる自学自習の徹底

週課題（学力診断テスト等の結果分析等で工夫）
（1）徹底した習得課題（繰り返し学習）　（2）応用的な問題を提示

提示するだけでなく、課題をに誠実に向き合うための指導の工夫は重要

学習の手引き提示
●学習の流れを明確化（学習計画を意識）
●評価基準を明確化（学びに向かう力）

2 協同学習によるコンピテンシー育成

協同学習（生徒に提示する項目）
（1）授業で自分が何をすべきか理解しよう。
（2）グループ活動に参加する前に自分の考えを持とう。
（3）グループの中で自分の役割を果たし、仲間の成長のために助け合おう。
（4）人の意見を聞いて、自分の考えを広げたり深めたりしよう。
（5）授業後に自分がどんな学習に取り組むべきか考えよう。

協同学習の意義を生徒に伝えながら、提示項目を実施して学習に取り組んでいるかどうかを自己評価しながら取り組んでいくよう授業内容をデザインしていく必要がある。

授業は各単元を貫く学習目標の達成を目指して多角的に計画されるものであり、一律に授業の流れを決めるものではないが、予習活動を前提とした先行学習と授業における協働学習の推進は本校の学びスタイルである事を踏まえ、指導計画を立案することが重要である。

協同学習を徹底し、協働的な学び・個別最適な学びのための望ましいコンピテンシーを育成することが重要
●個人の責任、互恵的な学習関係、学級の課題解決型集団化、解を導くための適切なグルーピング意識等
協同学習から自由進度学習へ（活用＆深化場面等の自由進度学習の方が成果がある時に実施
●学習方法や学習形態、学習用端末の活用方法等を自分で選択し、学習を深めていく。

荘内中版：学びスタイル「先行学習を基盤とした協働的な学び」

各授業SCENEは、1単位時間にいくつか設定される場合もあれば、1SCENEで1単位時間を費やしたり、学習内容により様々な構成が考えられる。単元の全体計画の中で適切にデザインしていくことが大切である。

協同学習&自由進度学習における重要な観点

1単位時間が基本

SCENE1　先行学習内容の確認場面「学習意欲の向上」

①予習課題の学習内容を短時間で教授（習得）
②生徒の疑問点や協働で話し合いたい事項等を確認
③生徒の理解度を確認
④生徒の相互説明による学習内容の確認等の学習活動（ジグソー法等）

SCENE2　教師の補説及び学習目標提示「教師の説明」「学習デザインを明確化」

①生徒の理解度から勘案し、必要な補説を実施し、学習ポイントを焦点化して教授
②学級全体の先行学習の状況を整理し学習の方向性を明確化
③学習目標・協同解決課題を提示

SCENE3　協働学習による学習内容の習得場面を設定「理解深化」

①生徒の学習班等のグループ設定を工夫（個人の責任と互恵関係）
②個別解を持つ場面を設定
③課題解決型学習を個別・ペア・グループ活動等で実施
　・個別解から活動の中で自分の考えを深化、修正することを重視「自己評価」
④アウトプット活動を積極的に設定

SCENE4　協働学習による学習内容の探究場面を設定「応用力育成」

①単元を貫く学習目標を実現するための探究課題を設定
②課題解決型学習を個別・ペア・グループ活動等で実施
　・個別解から活動の中で自分の考えを深化、修正することを重視「自己評価」
　・既習内容を活用しながら協働で課題を探究
③解を取りまとめてアウトプットすることで学習内容の一層の深化・定着を推進

★SCENE3・4については、単元目標の実現の観点から　どのように設定すべきかを勘案し、学習効果が期待されるよう単元学習内に適切に位置づける。また、グループ活動場面での個々の生徒の振り返り場面を設定しながら個別の学習進度を確認し、個別支援を行わなければ、個々の学力向上は図れない。

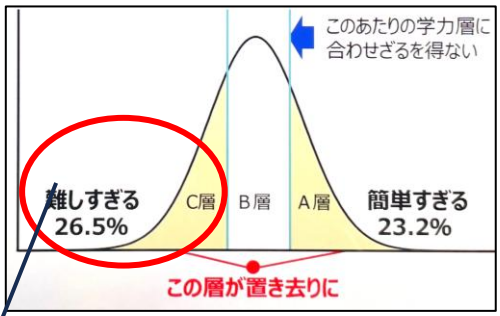
SCENE5　自己評価場面の設定「振り返り」「自己調整」

①予習課題実施後の自己評価から単元を通して適切な学習場面で自己評価を行って自己調整をする学習履歴を残す場面を設定
②単元末テスト実施後は自己評価表を記入させ、自己の学習の定着度から自分が再学習すべき項目を立案
③計画的に自学自習を行っていくよう、フォーサイト手帳活用を全教員で指導する。

自由進度学習の設定

自由進度学習は、協働的な学びと個別最適な学びを実現するスキームであり、目指すべき自走する学習者育成のイメージである。ただ単に導入しただけでは、学力向上の成果は得られないため、生徒の実態及び学習内容の深化で判断して導入していかなければならない。また、教科の特性にも左右される。

●協働的な学びに必要なコンピテンシーの定着状況で判断すること。
●学習内容の徹底深化場面での導入を推進すること。
●**先へ進み続ける課題提示と底辺層の生徒への教員支援を前提**とすること。



これまでの一斉授業＆宿題における課題

自由進度学習では教員が集めて支援

3　授業実施後の課題提示

（1）既習内容を整理する課題を提示
（2）個別最適が学習内容を提示
（3）協働学習を進める中で個の役割を果たす課題を提示
（4）アウトプットのための整理課題を提示

単元内で学習のPDCAサイクルを展開し個別最適な学びに向かう力を醸成

4　その他の視点

（1）SDGsの観点を常に意識し、学習内容を教授する。（社会・生活に繋がる学習推進）
（2）キャリア教育の観点を常に意識し、授業の中で未来社会をイメージさせる。

「まなトレ」(荘内まなびスタイルを徹底し学力向上を図る)①

生徒自身にどうやって学ぶのか、学校で行う協働的な学びの意義等を教える特設時間が「まなトレ」である。「まなトレ」は学活や各教科の時間に行っていくものであり、生徒に多様な学習形態で学んでいる意義を自覚させたり、提示課題の意義を伝えることで、学びに向かう力の育成を図っていくものである。

1 評価・評定をアップデートするために

多様な項目で評価

単元目標 → 先行学習を基盤とした協働的な学びで成果を上げていく。 → 先行学習評価 → 授業内評価 → 単元末テスト評価 → 再チャレンジテスト評価 → 単元評価

単元の学習の中で、様々な評価が行われていきます。(週課題も含む)

【各単元・学習のまとまり全体を通して学習を進める】
各教科では、単元ごとに学習の流れを示し、単元末テスト等のゴールを明確に知らせる。生徒は単元全体の学習の進度を意識して、日頃の先行学習課題等に取り組ませ、単元末テストに向けて自主学習を推進する。
★教科書を徹底的に読む、単元のスタディサプリやミライシード、MONOXERを繰り返し取り組む、チャレンジノートに学習内容をまとめる。

【日頃の授業を中心に学習を進める】(協同学習場面での評価、自由進度学習場面での評価等を明確に伝える)
先行学習として、授業以前に学習内容の概要をイメージし見通しをもって自学自習に取り組む予習学習活動を行い、授業では協同学習を推進して、他者の意見や考えを取り入れながら自己分析・自己調整を繰り返しながら個別最適な学習に意欲的に取り組み、自己の学力を高めるよう指導する。
★先行学習課題は必ず取り組み、授業内では積極的に協働的な学びに挑戦する。アウトプット活動をがんばる。

【単元末テストに挑戦する】(できるだけ業者作成のものを使用することで学力水準を担保すること。)
示されている単元末テストへ挑戦するための取組内容を計画的に実行し、単元末テストにチャレンジさせる。その後、再チャレンジテストに挑戦することも可能とし、向上心を高める。(下方修正もあり)
★計画的に単元末テストにチャレンジする。結果に満足できない場合はしっかり復習して再チャレンジする。
★週課題に計画的に取り組み、期限どおりに提出する。

各学期の単元ごとの評価がその学期の評定となる。日頃のまなびスタイルでの学習に適切に取り組むことが評価評定のアップデートにつながることを意識させること。



2 得点力をアップデートするために(2ヶ月サイクル学習)

フォーサイト手帳・学プロの活用が重要

1年間を通して、2ヶ月程度の期間ごとに**「学力診断テスト」**を実施する。このテストは、業者作成テストであるため、岡山県における学力水準の中で、自分の学力状況がどの程度か診断することができる。このテストを活用しながら生徒が自分の弱点を分析し、克服していくよう自主学習に取り組むよう働きかける。

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年	○		○		○			県テ○		○		○
2年	○		○		○			県テ○		○		○
3年	○国テ		○		○			○	進路決定	○入試	入試	○入試

○:学力診断テスト
国テ:全国学力学習状況調査
県テ:岡山県学力学習状況調査
6・9月は家庭学習強化月間
1月:私立一期入試
2月:私立2期入試・公立特別入試
3月:公立一般入試
★各テスト前は家庭学習強化週間

学力診断テスト

結果の分析で弱点整理
次回のテストまでの学習計画作成
苦手なところに挑戦する

【弱点領域の学習を徹底】
スタディサプリ等のAIドリルの積極的活用
教科書・ワーク活用

学力診断テスト

結果の分析で弱点整理
次回のテストまでの学習計画作成
苦手なところに挑戦する

【弱点領域の学習を徹底】
スタディサプリ等のAIドリルの積極的活用
教科書・ワーク活用

学力診断テスト

週課題は学力診断テストを考慮した内容(前年度既習内容等)で習得課題を

自分をアップデートするための学習サイクルを展開するためのフォーサイト手帳活用

高校入試等では、得点力も必要である。中学校入学後から3年生の10月の進路決定までに、自分の得点力をアップデートしていく意識を徹底して持たせていく。



毎日の計画的な学習の積み重ねで自分をアップデートできる、自分の望む未来をつかむため、しっかり取り組む意識を醸成する。

※「テスト週間」=部活動なし、という固定概念を払拭。そもそも部活動があっても本校は他校の部活動なし期間と下校時間は変わらない。部活動は関係なく、テスト期間として生徒に指導していくこととする。

「まなトレ」(荘内まなびスタイルを徹底し学力向上を図る)②

1 荘内学びスタイルの学習成果を理解する。

荘内学びスタイル(先行学習を基盤とした協働的な学び)の中での学習がどのような成果があり、しっかり頑張れば学力向上が実現できることを自覚させなければ、意欲的な取組には繋がらない。しっかりその理念を伝えなければならない。

先行学習のメリット

・教師の先行課題
・教科書を読む
・スタディサプリ
・AIドリル

①自ら進んで教科書をしっかり読んでおくことで読解力が高まる。
②わかることとわからないことが事前にわかるので授業で何をすべきか明確にできる。
③先行して学習内容のイメージが持てるので授業内の理解度が高まる。
④自分の考えを整理しておき授業で他の人の考えを聞くので足りない部分がよくわかる。

**全員参加の授業
協働的な学びのメリット**

・自分の責任を果たす
・わからないと言える。
・お互いに高め合う。

①一斉授業と違い、全員が授業に参加できる。
②お互いにわからないところを教え合い高め合うため、グループ全体で学習内容を理解できるようになり、取り残される者が出ない。
③一斉指導の授業では説明を聞くなどのインプット学習の割合が多いが、協働学習では話し合ったり説明し合うため、ほとんどがアウトプット学習となる。
④学力向上だけでなく人間力の育成、課題解決型集団という望ましい集団形成が実現でき、全員のウェル・ビーイングに繋がる。

**授業後の自主学習
週課題のメリット**

・チャレンジノート
・ワーク
・週課題

①学習内容を自分で復習すると定着度が高まる。
②自分の方法でチャレンジノート等に学習内容をまとめると定着度が高まる。
③AIドリルやワークに繰り返し挑戦するとテスト対応の実践力が高まる。
④学習内容は単元全体でイメージするように心がけると計画的学習ができる。
⑤週課題で知識の習得が高まり、学力診断テスト等の得点力がアップする。

【非常に重要なポイント】
脳科学で明らかになった**学習効果を上げるのはアウトプット活動を重視した学習であること**！生徒にしっかり理解させ、積極的にアウトプット活動に取り組ませる必要があるとともに、授業でも協働学習を進めることはマストである！また、協働学習での活動は集団づくりだけでなく、就職後の協働業務遂行にも役立つキャリア教育の視点からも重要であることを生徒に理解させること。



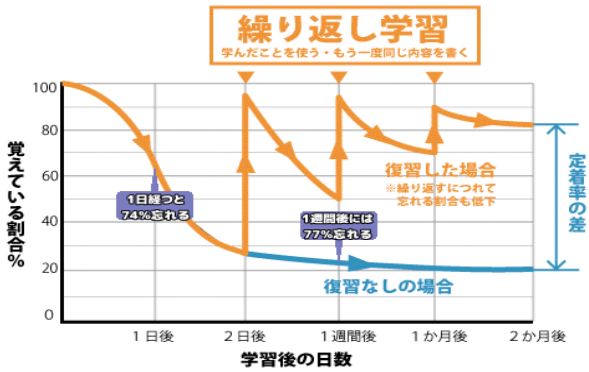
2 その他、様々な学習に関する取組を考えさせる。

(1)教科書をどう使うべきか。
①教科書がすべてであることを意識させる。
②ポイントを書き込んだり教科書を最高の参考書とする。
(2)ノートはどう使うべきか。
①ノートを取る目的は何かを考えさせる。
②ノートは作成後、どのように活用するためのものかを考えさせる。
(3)ワークはどう使うべきか。
①自分の弱点を繰り返し取り組むためにはどう使うべきか。
②テスト対策としてどのような使い方をするべきか。
(4)基本的な学習サイクルはどうあるべきか。
①エビングハウスの忘却曲線を考えてみる。
②忘れないために繰り返し学習はどうあるべきか。
(5)自学自習のために生成AIやAIドリルをどう使うべきか。

デジタルでまとめた方がいい生徒とアナログでまとめたほうがいい生徒がいる。基本的にハイブリッドで良い。

ノートは板書を移すためのものではなく、学習の目的を確実に考えさせることが重要である。個人で異なるため、自分で考えさせるための材料を提示して支援すべき。

エビングハウスの忘却曲線(脳の忘れるしくみ)より



教員が様々な学習レールを敷いてやるのではなく、自律した学習者として自分で取り組んでいくよう指導すること。